

調伏曾我

宮増作

前

ツレ 源頼朝

立衆一同 徒者

シテ 工藤祐経

ワキ 箱根の別当

子方 箱王丸

後

ワキ 前に同じ

ワキヅレ 徒僧

シテ 不動明王

季は 地は
相模 雜

一 同次第

「海山かけて行く雲の。 く。 箱根の寺に参らん。

頼朝詞

「抑是は兵衛佐頼朝とは我事なり。

一同 「夫れ治まれる御代のしるし。東南に雲をさまつて。

西北に風静かなり。

頼朝

「ことさら当時一統の。道も直なる文武の二つ。

一同 「何も叶ふ時代とて。

頼朝

「国見も是か坂峰や。

一同 「箱根詣での御為めに。

頼朝

「明くるを待つや星月夜。

一 同道行

「鎌倉山を朝立ちてく。まだ有明の影残る。雲こそ匂へ朝日影。西に向ひて行く雲の。富士の高根の程を知る。足柄山を分けすぎて。梢に浪を湖や。箱根山にも着きにけり。 く。

シテ詞

「やがて御社参あらうするにて候。

ワキサシ

「此程の日数待たれて今日すでに。鎌倉殿の御参詣。是を物見と此寺の。老若の衆徒児童。数をつくし

て我もくと。皆面々に誘へば。

子「人なみくに箱王も。かたへの児にさそはれて。

講堂の庭に立ちいづる。

詞「如何に申すべき事の候。

ワキ詞「何事にて候ふぞ。

子「鎌倉殿の御参詣。たまさかの御事にて候。御供の人々の名を知らず候。教へて賜はり候へ。

ワキ「易き間の事御尋ね候へ教へ申さう。

子「先づ一番に風折召され。念誦氣高く見え給ふは。
鎌倉殿にて御座候ふか。

ワキ「あれこそ鎌倉殿候ふよ。なんぼういみじき御威光にて候ふぞ。

子「さて御供の人々の。二行に列座せられたり。先づ

左の座上をば誰と申し候ふぞ。

ワキ「あれは鎌倉殿の御舅北条殿候ふよ。

子「左巴は。

ワキ 「宇都宮の弥三郎。

子 「右巴は。

ワキ 「小山の判官。

子 「松川は。

ワキ 「小笠原。

子 「さて又中座の一番は。

ワキ 「諸司の別当梶原父子。

子 「香の直垂二人はたそ。

ワキ 「一人の大男は和田の左衛門。今一人は秩父の庄司重忠。

子 「さて其次につき出だしたる扇づかひ。

ワキ 「今此方を見候ふや。

子 「あれをば誰とか申し候ふぞ。

ワキ 「あれこそ工藤一郎。

子 「祐経候ふか。

ワキ 「暫く。かやうの所に久しくは御座なき物にて候。

シテ詞
此方へ御入り候へ。

「あら珍しや箱王殿。御身の父河津殿は。赤沢山の狩くらにて。尾越の矢にあたりて空しくなり給ひたるを。某がしわざとばつと風聞仕り候。弓矢八幡箱根権現も照覧あれ。某は存ぜず候。

子「さてみづからが敵をば誰とか申し候ふぞ。

シテ「いや敵とは夏引の糸。筋なき人の言事を。かまひて用ひ給ふなよ。

子「用ひはせずと世がたりの。天に口なし人の言事。
シテ詞「それをも承引し給ふなど。

子「彼古武者の祐経に。

シテ「泣いつ笑うつすかされて。

子「さばかり猛き。

シテ「箱王も。

地「幼き身のかなしさは。誠しやかに言ひなされて。心もよわくと。あきれはてたる氣色かな。

地「さて頼朝は御座を立ち。く。早御下向有りしか

ば。御供の侍面々に。門前さして出でければ。

子「箱王は只一人。

地「講堂の庭に立みて。敵の跡を見送りて。泣くより外の事はなし。く。

子詞「よくくく物を接するに。げに我ながら後れたり。
今此時の折を得て。祐経が手にかゝらんと。同宿の太刀を盗みとり。

地「敵の跡を慕ひつゝ。駒の蹄にかゝらんと。門前さして追うて行く。く。

ワキ詞「言語道断。かゝる聊爾なる御事にて候。さやうの御心中有るならば。敵の前のたふれなるべし。只先帰りたまへとて。

地「手とり足とりいざなひ。別当の坊に帰りけり。
く。

ワキ「抑仏陀の御誓願。本より衆生の所願を満てゝ。

ツレ 「是も年月思ひ深き。

ワキ 「箱根の海の恨みをなす。

ツレ 「敵を亡ぼしたび給はゞ。

ワキ 「悪魔降伏の御誓ひ。

ツレ 「悪しきを平らげ善きを助くる。

ワキ 「其御威光を頼まんと。

ツレ 「こゝはの行者。

ワキ 「十余人。

地 「護摩の壇上をかまへつゝ。く。凡そ飛ぶ鳥をも。
落すばかりと面々に。刃の驗徳を顯はして。

地 「年頃たのみを懸くる大聖不動明王の。火焰に愚老
が其身を焦がし。五智の如来に五体を投げ。大威
徳の乗り給ふ。水牛の角に命をかけ。頭を傾け数
珠をもみ。薬師の真言千手の陀羅尼。妙音声を高
くあげ。

ワキ 「東方。

「抑是は。中央に立つて悪魔を降伏し衆生を守る。

大聖不動明王。矜伽羅制多伽を始めとして。

地「五壇の上に顯はれ給へば。

シテ「護摩の煙。

地「不動の火炎。

シテ「光明赫奕として。

地「氣色もあらたに五大尊の。四面の仏前に顯はれ給ひて。かの形代を調伏し給ふ。あら有難や怖ろし

や。

地「山河草木震動し。山河草木震動して。箱根の海山の。御法もおのづから。実相の色を顯はし。自性の月の光を添へて。護摩の煙の上も隈なき。鈴の声耳に通じて。明々とすみやかなり。

シテ「東方の降三世明王は。

地「降三世明王は。青蓮のまなじりに悪魔を降伏して。壇上に翔り給へば。南方の軍荼利夜叉は。火炎の

ほのほを吹きかけ給へば。大威徳は水牛の。角振
りたてゝ顯はれ給へば。北方の金剛夜叉は。寒風
の鉄雨を降らして。大紅蓮の責めをなせば。中央
の大聖不動は。さつこの縄にて祐経が。形代を巻
き縛り。護摩の壇上に引き伏せて。利剣を振りあ
げ刺し通して。猶嚴重の奇特を見せんと。形代が
首を切りて。剣の先につらぬき給へば。身の毛も
よだちて面々に。目をおどろかす有様なり。さて
こそ遂には箱王も。く。其本望をば遂げにけれ。